

<天使>とは？

大村 恵美子

また今年もクリスマスが近づき、私は、1997年のドイツ演奏旅行で、ドイツ人会衆といっしょに6回（ケルン2、アイゼナハ、ライプツィヒ、ベルリン2）も歌ったボンヘッファーの「善き力にわれかこまれ」（「讃美歌21」469番）のことを思い出しています。これは、よく知られているように、ボンヘッファーが、最後のクリスマス（1944年）に、獄中から家族に思いを馳せてつくった詩です。それが、のちにドイツの讃美歌集にとり入れられたものです。

「<善き御力持つ者らに>は、天使の歌である」（『ボンヘッファー獄中詩篇』J.ヘンキース編著、内藤道雄訳、p.173）。

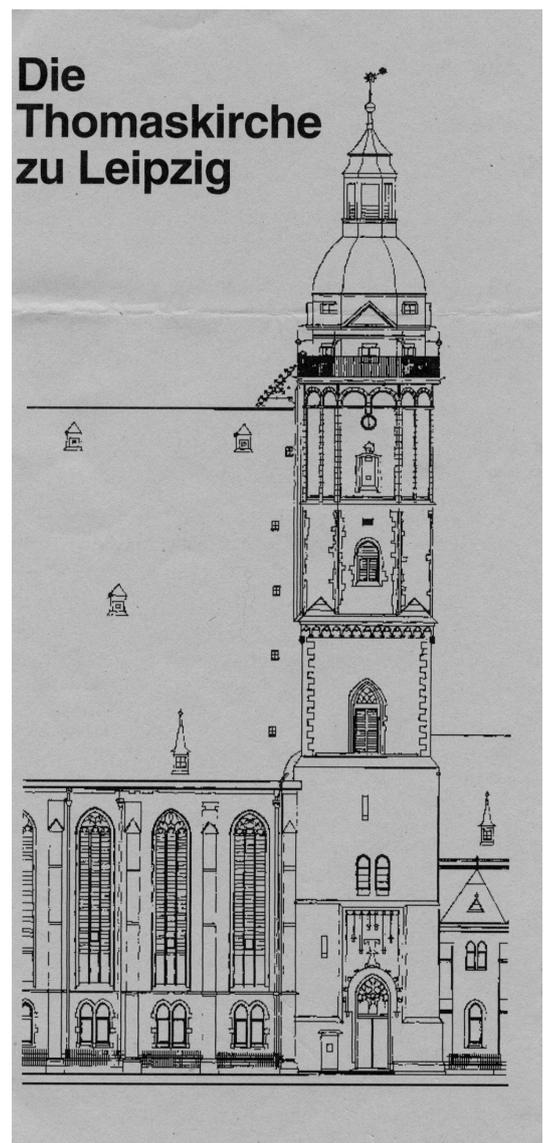
1998年5月の定演でとりあげた、カンタータ第19番くかくて 戦い 起これり>の中でも、とくに聴きごたえのあるテノール・アリアで、バッハはシチリアーノ風の優美な調べにのせて、“とどまれ かたえに、天使よ、わが かたえに、支え みちびけ われを”と歌わせています。私は、このカンタータを、ミカエルと龍との戦いという題材から、バッハが子供を意識してつくったものと想像しますが、この時にも、現在の私たちにとって、天使とは？という思いを、やり過ぎて終わりました。

去る9月28日にあったボンヘッファー研究会例会で、上記の詩を学んだとき、また私は、<天使>とは？という問いを出してみました。私たちは、ヨーロッパの美術で、キューピッドのように愛らしい赤ん坊の姿をした天使や、ジョットやフラ・アンジェリコの絵にみられる、清廉で威厳のある天使など、さまざまな天使の姿を心であたためて、実在感を深めてきたように思います。今年の夏、オーバーアマガウで見た受難劇にも、天使が出てきて、そのプレゼンスにどのような意味をもたせているのか、私はテキストをたどり、目をこらして、見ていました。

私は、前述の研究会で、「私には、天使の感じは、現実的にはつかめない、むしろ聖霊と考えればわかり易いのですが」と言いましたが、いろいろ牧師さん方からたしなめのお言葉があり、「聖霊は神です。天使は被造物です」「聖書の多くの場面で、天使の存在がみとめられています。それを受け入れなければ

分が感じられないものを否定するのは危険」といった具合でした。

私のひそかに思っているところは、天使とは多分にヨーロッパ文化の芸術的遺産から日本人たる私たちはイメージをつくっているように思われる。現代でも、ひと頃ヒットしたドイツ映画『ベルリン、天使の詩』などで、天使のイメージを私たちに引きよせられている。仏教ならば観音さま、菩薩さまのたぐい



私たちは、幼児の部分、また生活の場面では眠りに関連して、このような天使的なものとの接触を経験しやすいのではないのでしょうか。すなわち、無防備な純粋の〈われ〉に帰るとき、一フロイトやユングの説をもちだすまでもなく一人間はいちばん尊い体験にも出くわすのでしょうか。

「元来幼児は、親と分離して孤立した眠りにつくことに恐怖感をいだくものであり、心を鎮めるための様々な儀式や、守護天使、守護神、守護聖人、マリヤ様、イエス様、神様、あらゆる知恵をふりしぼって、わけのわからないカオスの闇からの安全を切願するのである」（第 83 回定演プログラム、カンタータ第 19 番解説より）。子供たちが、つぎつぎに怪人、怪獣と親しみ、それについて異常なほどの関心を示すのも周知のとおりです。

また例のボンヘッファーの詩について、私は「獄中の彼は、婚約者マリヤや母親のおもかげに、天使のイメージを結びつけていたのでは」と言いましたら、「それなら、“善き御力もつ者らに…囲まれ、護られ、慰められ”というのと、“私はこの日々をあなたがたとともに生き”というのとが斉合しない」とのご指摘がありました。でも、これは必ずしも、矛盾しないと思います。“あなたがたとともに mit euch” は、この 1 カ所だけですが、ここをただマリヤと母親とのことを指すと限定して考える必要もないのではないのでしょうか。

「ボンヘッファーが詩の中で、〈天使〉という言葉避け、この〈天使〉より、もっとあからさまに神話的なものにのめりこむ聖書からの名称も一切用いていないのは、納得できることである」（ヘンキース前掲書、p. 174）。

そして、同じ本の 226 頁で、E. ベートゲは、このように意味を深めています。「J.-Ch. ハンペが、〈善き御力もつ者ら〉の語り口から、ボンヘッファーの兄弟姉妹がみな暗記していたフンパーディンクの 14 人の天使の歌を想起しているのは正しいでしょう。しかしボンヘッファーの表象世界にとって、これは 14 人の天使以上のものです。そう、彼にとって掟、典礼、礼拝上の日々年々の秩序も、〈善き御力もつ者ら〉、つまり天使なのだということを、神学者は示すことができるでしょう。そうです。神は失敗と過誤からさえいつかある日、私たちのために〈善き力〉を生み出すことができるのです。それらが私たちから決定的なものを奪うとき、邪悪なものとなりますが、決定的なものを生み出すなら、これは善きものなのです。このようにして彼らは第 1 詩節のうちに自らの場所を得ているはずです。」

Von guten Mächten treu und still umgeben,
behütet und getröstet wunderbar,
so will ich diese Tage mit euch leben
und mit euch gehen in eine neues Jahr.

善き御力 持つ者らに かわりなく 静かに 囲まれ
護られ、こよなく 慰められ

私は この日々を あなたがたとともに 生き
ともに 新しい年へ はいって行く。

（内藤道雄訳）

ベートゲが、〈善き御力もつ者ら〉という複数のものを、人物に限定しないで範囲をひろげたことに、つまり状況的なものにも思いを致したことに、同意します。次元を下げた言い方になるかもしれませんが、人間は、人為的なものと不可避的・運命的なものとの間を問わず、遭遇する状況次第で、天使的にも悪魔的にもなりうるものです。幼児のあどけない、相手を信じて疑わない反応に接するとき、私は天使に出会った思いをし、成人でも同様、たがいを信じて心を開きあう人々に接するとき、天使の群れをかいま見た気持ちになるのです。私は、そのように、推移し変動する日々の人間の営みの中に、天使を象徴する姿を感じ、その人間同士をつなぐ場をつくる力に、神の聖霊を信じようとします。外来的に、雲の上を漂っては、舞いおりて人間をみちびく、古典的な天使の姿は、美術鑑賞用として愛してはいますが。

クリスマスごとに、その存在感を輝かせる天使たちに、私たちははげまされ、慰められはしても、お互いの中に天使の相を見いだして愛しあう意志こそ、いまの私たちにとって一番のクリスマスの贈り物となるのではないのでしょうか。――

ここまで書き終えて約 1 月たった 10 月 29、30 日、ボンヘッファー研究会で、著者のヘンキース博士をベルリンからお招きした合宿の研修会がありました。全部で 10 篇あるボンヘッファーの獄中詩について、ヘンキース博士の充実したお話、また会長の武田武長氏による原語講読があり、〈天使〉の問題もかなり詳細に考える時間をもつことができました。とても豊かなその内容について、ここで再現するわけにはゆきませんが、大筋において私が書いておいたことに、訂正するような必要はないという気がしましたので、あえて新しいコメントは付け加えないことにいたします。

美しい天使の飛びかう、すばらしいクリスマスを迎えられるように。



ブリューゲル
「ベツレヘムの
嬰兒虐殺」
(1566年頃、ウ
ィーン美術史美
術館)

「さて、ヘロデは占星術の学者たちにだまされたと知って、大いに怒った。そして、人を送り、学者たちに確かめておいた時期に基づいて、ベツレヘムとその周辺一帯にいた二歳以下の男の子を、一人残らず殺させた。こうして、預言者エレミヤを通して言われていたことが実現した。

“ラマで声が聞こえた。

激しく嘆き悲しむ声だ。

ラケルは子供たちのことで泣き、

慰めてもらおうともしない、

子供たちがもういないから。”

(マタイ 2 : 16-18)

このような、権力によるサタンの光景は、古代の言い伝えの中に見られるだけでなく、現に 20 世紀末の世界の隅々でも、もっと大規模に徹底してくりひろげられた。21 世紀も人類は、まだこのような愚行で歴史をけがし続けるのだろうか。

バッハの<クリスマス・オラトリオ>では、テノール福音書記者がいちばん最後 (第 6 部、第 60 曲) に告げるのが、次の個所である。

「(占星術の学者たちは) “ヘロデのところへ帰るな” と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」 (マタイ 2 : 12)。

聖書ではこのあとヨセフが、マリヤとイエスを連れてエジプトに避難したことが記され (マタイ 2 : 13-15)、それから上述したベツレヘムの嬰兒虐殺がつづく。この個所を、バッハはオラトリオの中には直接とりいれず、第 61 - 63 曲で、神に挑戦する敵への勝利を宣言し、最終の第 64 曲で、フルオーケストラとコーラル合唱によって、大いなる凱旋音楽を、高々と奏でて全曲を終らせている。このように、嬰

児虐殺が、第 6 部の怒り・戦い・勝利の基調の、語られざる契機となっているのである。

敵は いまや 撃退された

さからう 敵を

キリストが うち破られた

死も おそれも みな 消え失せ

われら 人間は 神の側に

立場を 勝ち得たのだ (第 64 曲、終結コーラル)

バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.8

オーディオ・ファンの方々へ

—楽譜は演奏家だけのものではありません—

バッハのカンタータを愛好されるオーディオ・ファンの皆様、CDなどをかけながら、それについている解説や、バッハに関する数々の書物を、熱心に読んでおられることでしょう。これからは、それをもう一步踏み込んで、楽譜を開いてお聴きになってはいかがでしょうか。

オーケストラパートも入った総譜は、音楽を聴きながら同時に読みこなすには、相当の熟練を要します。その点「バッハ・カンタータ 50 曲選」のように、声楽パートと、ピアノ用にアレンジしたオーケストラパートに集約された楽譜(ピアノ・ヴォーカルスコア)は、ずっとわかりやすく、CDを聴く前後にみずから反復して歌ったり弾いたりしてみるのにも適しています。

楽譜は自分には縁遠いものと敬遠なさらず、試してごらんになれば、バッハの音楽がぐっと身近になり、たくさんのお事柄がおのずと解ってくるにちがいありません。

さらに原詞と対訳・訳詞がつけ加えられている、この楽譜選集は、CDなどの鑑賞にも、これからは欠かすことのできないものとなるでしょう。ぜひお試しになられますことをおすすめします。

新刊紹介

ダーフィット・フルッサー著

『ユダヤ人イエス

—キリスト教とユダヤ教の対話』

武田武長／武田新 訳

新教出版社

2000年9月刊

今年、カトリック教皇の他教への赦しを乞う発言をはじめ、世界各地で、他宗教との長年の確執から共存への転換をはかろうとする、画期的な試みが続いて起こった。この著書も、原著の初版は1968年ということだが、世界中で訳されてすでに約10万部も出され、日本でもついに、この2000年という記念すべき年に、訳書が私たちに提供されることになったのは、ほんとうに嬉しい。

何よりも、イエスと同時代の古文書から、キリスト教信徒の目を通してではない、ある程度客観的なイエス像が浮かびあがり、またイエスの出自であるユダヤ教の世界が、この異端児をどのように見てきたのか、これはぜひ知らねばならない視点である。イエスとクムラン教団、洗礼者ヨハネの弟子たち、サドカイ派、パリサイ派、エッセネ派、政治的過激派、またローマ官憲やユダヤの支配者たちとの関係において、イエスがどの集団にもくみせず、しかもあらゆる同時代のこれらの集団から影響も受け、また時代的制約すらも自分の中に引き受けて、賢明に言動を処してきたことが、多くの証言から明らかにされる。

まさにイエスは、がんじがらめに幾重にも異なるしがらみによって痛めつけられながら、重い人生を辿っていたユダヤ人たちの社会のただ中に、共に生きながら、勇敢にも革命的な福音を世に投げかけたのだった。ユダヤ人社会の、歴史的・地域的な多くの類似の史実や伝説と比較しながら、著者は、イエスの言動の大半のものが、イエス独自のものではなく、当時のユダヤ人としては、あり得る範囲のものだったことを例証する。

にもかかわらず、著者がイエスについては、まったく鮮明に、オリジナルなものとして挙げているただひとつの点がある。

「彼（イエス）は、人は終末の時の際に立っているということばかりではなく、同時に、救済の新たな時代がすでに始まったのであるということをも告げ知らせた、唯一わたしたちに知られている古代のユ

ダヤ人である。」（訳書 p.114）

「そこではすべてのものに対する神の無条件の愛が見えるようになり、罪人と義人との境界が打ち破られる。」「イエスの終末的でない道德の教えも察するところ御国についての福音へと方向づけられていたのかも知れない。サタンとその悪霊たちは権力を奪われ、目下の世界秩序は自ら崩壊するので、……すべてこれらのものは神の国の出現において過ぎ去るであろうからである。」（p.116）

このような発言は、ユダヤ教側からのものとして、大変な評価のことばであろう。また、エルサレムの神殿についても、「イエスは神の名においてユダヤの黙示思想の精神に基づいて語った。すなわち、現在の神殿は破壊され、別の神殿が神の手によって建てられるであろう、と。」（p.114）

まさに2000年、私たちの生きているこの現在、地上のエルサレム神殿は、他宗教の人々と血を流して奪い合う、わざわいの砦となっており、イエスの呼びかけに真っ向から背く争いに、人類は相変わらずしがみついている。私たちは、この著書からも、また聖書そのものからも、行動的な、より強力にザッハリヒな教訓を読み取り、生かさなければならぬのではないだろうか。

すばらしい訳業に、一つだけ疑問を。「<イエス>は、ヨシュアという名に通常あてられるギリシア語形である。イエスの時代にはこの名前はイエシュアと発音され、ナザレのイエスは古代ユダヤ教文献の中では折々そう呼ばれている。」（p.15）

それならばどうして<イエス>と訳されなかったのだろうか。私たちは、バッハの音楽を歌うとき、必ず<イエ・ス>と歌い、<イ・エ・ス>とは分けない。これと同じように、たとえば<テキスト>がいつまでも<テキスト>と言われているが（この訳書に関係のないことだが）、明治以来ひきつがれて表示されてきている外来語も、あきらかな違いは、なるべく国際的にも通用するよう、ただしてゆくべきではないかと、私は考えている。ご一考を。

（大村恵美子）